

オーストリアの注目の真空管ブランドが上陸!

自ら三極管製造まで手掛けるメーカーから 高いコストパフォーマンスを誇る2機種が登場

Profile

Ayon Audio社は2000年に設立されたオーディオブランド。本格的に活動を始める7年前の1993年から、今日に至るまで、三極真空管アンプの設計製造に主力を注ぎながら、自ら真空管製造に携わり、いまや高級機から普及機まで、幅広い製品ラインアップを誇っている。今回紹介される2モデルのうち「Scorpio」は「Spirit」の弟機として、基本的な設計思想を受け継ぎながらシンプルに設計されたモデル。同社が創業時からこだわり続けるシングルエントッド・トライオード・アンプリフィケーション、真空管出力ステージの三極管モード作動をKT88プッシュプルで実現。「Spirit III」はKT150シングルエントッド・プッシュプル、ハイエンド真空管プリメインアンプで2006年にその原型が誕生し、アップグレードを重ねながらIIIへと進化させてきた。Scorpio同様に三極管モードをKT150プッシュプルで実現した高品位モデルである。

TEXT by

鈴木 裕

Yutaka Suzuki

Photo by 田代法生

ayon Scorpio

管球プリメインアンプ
¥390,000(税別)



ayon Spirit III

管球プリメインアンプ
¥690,000(税別)



Specifications

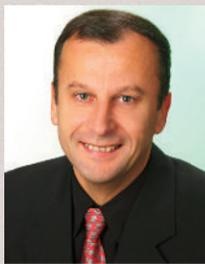
【Spirit III】

●出力動作方式:五極管モードまたは三極管モードでの純A級プッシュプル●使用真空管:KT150×4、12AU7×2、6SJ7×4●負荷インピーダンス:8Ω●帯域幅:12Hz~60kHz●出力(5極管モード):65W×2●出力パワー(3極管モード):40W×2●入力感度(for full power):500mV●入力インピーダンス(1kHz):100kΩ●NFB:0dB●ボリュームコントロール:MCUベース・抵抗素子スイッチング回路●入力:RCA×3、XLR×1、Direct In×1●出力:Pre Out×1、スピーカーターミナル(バインディングポスト)●消費電力:165W●サイズ:480W×370D×250Hmm●質量:32kg●付属:リモコン

【Scorpio】

●出力動作方式:五極管モードまたは三極管モードでの純A級プッシュプル●使用真空管:KT88×4、12AU7×3●負荷インピーダンス:8Ω●帯域幅:15Hz~50kHz●出力パワー(5極管モード):45W×2●出力パワー(3極管モード):30W×2●入力感度(for full power):500mV●入力インピーダンス(1kHz):100kΩ●NFB:0dB●ボリュームコントロール:モータードライブ・ポテンショメーター●入力:RCA×4●出力:スピーカーターミナル(バインディングポスト)●消費電力:120W●サイズ:460W×340D×250Hmm●質量:28kg●オプション:リモコン●取り扱い:アクセシブル

開発者から



Ayon Audio owner & designer
Gerhard Hirtz

Ayon(アイオン)の原点は、1990年代の半ば、かの300Bを超える名三極管を生み出したチェコの天才的エンジニアAlesa Vaic氏との出会いにありました。以来私は、その、最も純粋主義的な電子の振る舞いに魅了され、今では真空管製造にまで携わるなど、その誘惑は未だ尽きるところを知らません。ゼロフィードバックを始めとする特異なフィーチャーで「シングルエントッド・トライオード」という増幅技術におけるピュアリズムを極めるAyonアンプは、あらゆる球のポテンシャルを存分に引き出し、音楽が持つエモーションなエネルギーを極めてナチュラルに、そして、官能豊かに再現する能力を秘めています。日本のオーディオファイルの皆様、ぜひご自身の耳と感性でお確かめください。

超えた音を感じさせる点だ。
KT88らしいサウンドで、現代的な表現のScorpio
 開発された順番としては後に紹介するSpiritの弟機として登場したのがScorpio(スコピーオ)だ。アイオンがスタートして以来ずっとこだわり続けているシングルエンドの三極管接続をKT88のブッシュアップで構成している。ちょっと見た感じだとスピリットとスコピーオの大きさの差は分かりにくいのが、幅で2cm、奥行きで3cmだけ小さいサイズだ。その音を本誌試聴室で確認してみた。レコードとCDの両方をお

け、TAD/EIを鳴らしている。まず五極管接続で聴くと、芯の強い音調で、高い駆動力、制動力を持つている。基本的にアキュレトなトーンで、反応のいい現代的な表現のアンプだ。低域はすこしだけ量感タイプの成分を持つているがストレートな音の聴かせ方。高域の倍音は多めで伸びもいい。全体的にやや強めのテンションを持った音。
 三極管接続では、音の感触が若干ソフトになり、テンションとしてもナチュラルになる。温度感としても上がって、このアンプにおいてはこちらの方がメインの音に感じた。KT88らしい、きちんと

と骨格をもった音でありつつ、音はよくほぐれ、音楽を聴くのにふさわしい寛いだ感じや、音色的なコクもある。音場はやや手前に展開しつつ、見通しのいい感じを持つている。
KT150によるSpirit IIIはオーディオ的な情報量が実に多い
 Spirit(スピリット) IIIはアイオンの中で、ハイエンドのプリメインアンプだ。KT150をブッシュアップで使用している。スコピーオとの違いは、ややボディが大きく、ボリュームコントロールをMCUBベースの抵抗素子切り替える型にした点や、スピーカー端子にWBT製を採用。プリとパワーを分離することができたり、グラウンド分離のスイッチを装備して、パワーアンプ使用時のグラウンドループを改善するなどの高音質化が図られている。
 まず五極管接続で聴くと、キメの細かい、より重心の低い音で、積極的に音を聴かせる感覚が素晴らしい。音場空間は広く、音像は立体的で、低域の音の剛性感も高い。スコピーオでも駆動力は十分にあつたがさらに強力で、質感の描き分けも緻密だ。
 三極管接続にすると音場がやや

真空管の製造までを行い、多彩なラインアップを持つ
 ayon(アイオン)はオーストリアのハイエンドのオーディオ機器メーカーである。その名前の正式な設立は2000年だが、実質的には1993年にスタートして、当初から三極管の真空管アンプの開発をメインに展開してきた。メーカーとして興味深いのは、三極真空管A62Bという、真空管自体の製造をしたり、デジタル関連の製品やスピーカーも製造している点だ。
 そのテクノロジーには先進的なところがある。一例を挙げればチューブテスターの存在だ。アイオン社の製品に搭載される全ての真空管は、特別にカスタムメイドされたAmplifier AT1000という、真空管の各種特性を計測できるテスターにかけられ、同時にバーイン(慣らし)もされている。テスト項目は、プレート電流、トランスコンダクタンス、フィラメントからカソードへのリレージ、内部ガスの状態、マイ

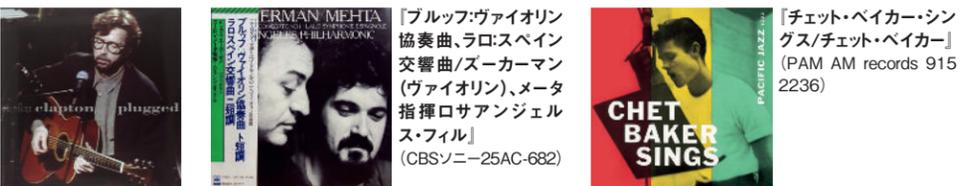
一方、アンプとしての設計思想は、可能な限り回路をシンプルにして短い信号経路を達成。真空管の動作特性の一番いい部分での、高電流/低インピーダンス設計により、純度の高い信号増幅とダイナミックなパワーを目指している。
アンプは純度の高い信号増幅とダイナミックなパワーを目指す
 負帰還のみならずあらゆる種類の帰還フィードバック回路をなくし、また、ソリッドステートデバイス等は信号経路には一切入れていない。パーツ類自体、高品質のものを選んで、入力切り替えのセレクタースイッチは入力端子に近いところにリレーを置くなど、実装状態での洗練度も高いアンプだ。

今回、日本市場に登場したのは豊富なラインアップの中から、プリメインアンプの2機種。どちらも三極管接続と五極管接続をスイッチで切り替えられる。両モデルともにアルミのシャーシで、表面はブラッシュド・アノダイス処理、放熱を考えたベンチレーションデザインを取っている。真空管のソケットにはベリリウム銅のスーパーキングピンを組み込んだオリジナルのパーツを投入。ベリリウム銅は非磁性体であり、火花が出ない等の優れた特性を持っている。他にも電源関係のパーツや線材、端子など、枚挙に暇がないほどの最適化されたパーツが使われている。ただし結論から言うとその最大の魅力は、両機種ともに価格を

組み合わせた機材と試聴ディスク



●主な試聴ディスク(アナログ)



手前に展開し、より音楽に近い感覚が強くなる。音色にはコクや深みがあるが、オーディオ的な情報量が実に多いため、多彩な音楽に対してヴァーサイルな表現力を持つている。趣味性の強い音でありつつ、これほどオーディオ的偏

差値が高いアンプも珍しい。スコピーオの真空管アンプの良さを全て持っている音と、スピリット III の高分解能で情報量の多い、しかも趣味性の強い音。真空管アンプ初心者の方にも薦められる製品だと感じた。

ayon Scorpio & Spirit III DETAILS



Scorpioの背面端子部。三極管切り替えスイッチなどが背面に配置されているほかSpirit IIIと比較するとシンプル構成になっている



Spirit IIIの背面端子部。掲載画像は試作機のもの。完成品はスピーカー端子のプラス側が2系統配置され、4Ωと8Ωの2系統配置される予定



Scorpioを真上から見たところ。使用真空管はKT88×4、12AU7×3となっていて、配置は写真のようになっている。真空管はSpirit IIIと同様に、すべて特別なテスターでマッチングが図られている



Spirit IIIを真上から見たところ。使用真空管はKT150×4、12AU7×2、6SJ7×4となっていて、配置は写真のようになっている。ちなみに真空管はすべて特別なチューブテスターで厳密なマッチングが図られている